

- 「青天の霹靂」は、県産米のトップブランドとして実需者から高い評価を得ているが、需要に見合った供給量と品質の確保が課題。また、令和5年に本格デビューを迎える新品種「はれわたり」の普及拡大が課題。
- このため、中南農業普及振興室では、関係機関の指導員を構成員とした中南地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチーム(以下PT)を編成して、生育調査データの共有や課題の抽出と解決策の協議を実施。
- その結果、「青天の霹靂」の作付面積が増加した他、出荷基準達成率や単収が向上した。「はれわたり」は、品種特性が周知され令和5年産作付見込み面積が大幅に増加した。

具体的な成果

1 「青天の霹靂」作付面積の増加

■「青天の霹靂」の経済的な有利性が浸透し、作付面積や新規作付け者が増加 (R2→R4)

① 作付面積

1,014ha → 1,408ha

2 「青天の霹靂」出荷基準達成率と単収の向上

■講習会や生産情報の提供や個別指導を行い、出荷基準達成率や単収が向上 (R2→R4)

① 出荷基準達成率

92.0% → 98.6%

② 単収の向上

8.6俵 → 8.7俵



2 「はれわたり」作付面積の増加

■「青天の霹靂」のみを対象とした既存のPTの活動計画に「はれわたり」を加えるため、中南地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導PTを編成

■「はれわたり」の品種特性の周知が進み、作付面積が増加

① 作付面積実績(R2→R4)

0ha → 20ha

② 令和5年産作付見込み面積 738ha

普及指導員の活動

令和3年

■「青天の霹靂」作付拡大運動(6～9月)を展開し、経営面でのメリットを強調したチラシを配付し、啓発した。

■中南地域「青天の霹靂」生産指導PTでは、連絡会議の開催(5回)、生育観測ほの設置(13か所)、現地講習会の開催(5回)、生産情報の提供(27回)を行った。

■前年産出荷基準未達者に対して「青天ナビ」を活用して個別指導を実施した。

■「はれわたり」普及に向けて試作ほを設置(4か所)した。

令和4年

■「青天の霹靂」は前年同様に、PT内での情報共有と個別指導を実施した。

■中南地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導PTとして再編成するため、構成員に対して事前周知を図った。

■「はれわたり」は、生育観測ほの設置(4か所)、現地検討会の開催(8, 9月)、及び連絡会議(8回)を開催した。

普及指導員だからできたこと

・管内JAや集荷団体、研究機関や県行政との連携を密にし、生産現場の問題点の集約や解決策の提案や協議等、連絡会議を通じて迅速に行うことが可能。

需要に応える「青天の霹靂」の生産と 新品種「はれわたり」の普及拡大

活動期間：令和3年度～令和5年度

1. 取組の背景

「青天の霹靂」は、県産米のトップブランドとして、実需者から高い評価を受けているが、需要に見合った供給量が確保されていない。また、ブランド価値を維持するためにも良食味で高品質安定生産が課題となっている。

また、令和4年に奨励品種に指定された「はれわたり」は、令和5年産の本格デビューを迎えるにあたり、生産量を確保するために、生産者への品種特性の把握と周知が必要である。

2. 活動内容（詳細）

(1) 「青天の霹靂」作付拡大運動の展開

「青天の霹靂」作付拡大運動（R3,6～9月）を展開し、経営面でのメリットを強調したチラシを講習会等で配付し、意識啓発を図った。

(2) 中南地域「青天の霹靂」生産指導プロジェクトチームを核とした活動

中南地域「青天の霹靂」生産指導プロジェクトチームでは、連絡会議の開催（R3：5回、R4：8回）、生育観測ほの設置（R3：16か所、R4：13か所）、生産情報の提供（R3：27回、R4：26回）、現地講習会の開催（R3：5回、110人、R4：7回、206人）により、関係機関や生産者との情報共有を図った

(3) 「青天の霹靂」の前年産出荷基準未達者に対する個別指導の実施

「青天の霹靂」全生産者の出荷基準達成を目標に掲げ、前年産の出荷基準未達者を対象に、「青天ナビ」を活用して、作付け圃場の確認、適切な肥培管理、適期刈取等を指導した。

(4) 「はれわたり」試作ほの設置

試作ほを設置・調査し、関係機関や生産者と情報共有を図った。

(5) 中南地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチームの再編成

「青天の霹靂」のみを対象とした既存の中南地域「青天の霹靂」生産指導プロジェクトチームに、新たに構成員を加え、中南地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチーム（以下中南PT）の再編成した。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 「青天の霹靂」作付面積の増加

「青天の霹靂」の経済的な有利性が浸透し、令和2年産作付面積は1,014haであったが、令和4年産作付面積は1,408haまで増加し、県全体の作付目標面積を突破。さらに、令和5年産は1,498haまで拡大している。

なお、中南管内の面積は、普及による聴取結果である。

(2) 「青天の霹靂」の出荷基準達成率及び単収の向上

中南PTによる講習会等の活動と、前年産出荷基準未達者に対する個別指導を並行して支援した結果、出荷基準達成率は令和2年産の92.0%に対し、令和4年産は不順天候にもかかわらず98.6%と向上した。また、単収は令和2年産の8.6俵に対し、令和4年産はわずかながら8.7俵と向上した。

(3) 「はれわたり」作付面積の増加

令和3年より試作ほを設置し、品種特性の把握と周知に努めた結果、病気に対する強さや良食味性等の品種の有利性が理解され、令和4年産作付面積は約20haに増加。なお、令和5年産は約740haに拡大した。

また、津軽みらい農協ときわ良質米部会においては、「つがるロマン」から「はれわたり」への令和6年産からの全面切り替えが決定した。

4. 農家等からの評価・コメント（弘前市I氏）

プロジェクトチームによる活動では、他の集荷団体の取組状況や生産面での課題を共有でき、参考になっている。また、生育調査のデータを迅速に共有できる体制が整えられたため、今後も継続した支援を期待している。

5. 普及指導員のコメント（中南地域農林水産部・主幹・若本由加里）

既存品種の作付面積の拡大や新品種の普及拡大は、生産者の理解を得ることが重要である。その点で、普及指導員の個別活動のみでは、多大な時間と労力が必要であるが、プロジェクトチームによる活動においては、関係機関の指導員が一丸となり、共有した情報を、生産者に迅速に発信できることから、非常に効率的であると考え。プロジェクトチームによる支援体制を強化するためにも、普及指導員は、常日頃より関係機関との緊密な連携を図る必要があると考える。

6. 現状・今後の展開等

「青天の霹靂」、「はれわたり」いずれにおいても、良食味・高品質生産と単収の確保を目指しているが、昨今の頻発する異常気象下においては、安定生産に対する不安要素が大きいことから、気象条件の影響を受けづらいマニュアルに基づいた基本的な栽培技術の励行を、関係機関と情報共有しながら活動を展開していく。